

東日本大震災から6年

一般財団法人みやぎ静心会国見台病院

院長 岩館 敏晴

私事になるが、私は地震男である。最初の被災は小学2年のチリ地震津波（1960年）であった。夜明け前、父親に起こされ、ランドセルに荷物を詰めて親類の家に避難しろと言われた。眠い目をこすりながら、何が何だか分からないまま、同胞3人で日の出を見ながら約3 kmを歩いて親類宅に到着した。遅れて到着した両親や大人達は真剣な顔をしてラジオに聞き入っていた。夕方になり、もう大丈夫だと言われて自宅に戻った。翌日、母親に連れられて港に出かけた。家を出てほんの2～300mのところ、ここまで津波が来たんだよと聞かされた。津波と言われてもピンとこなかったが、港が近づくにつれ、その破壊力に驚いた。屋根の上に漁船や犬小屋が上がり、線路は宙に浮いていた。岸壁のコンクリートは崩れ、露出した鉄筋が波に洗われていた。道端のあちこちで畳を天日干しする人達がいる、今では使用禁止になった殺虫剤 DDT の粉を振り撒いていた。母親からトイレの糞尿も流されて不衛生だからこうしているのだと説明を受けた。こんな光景は、もう一生見ることはない、そのときは思っていた。

次の被災は高校1年の十勝沖地震（1968年）であった。木造2階建て校舎の1階で地理の授業を受けていた。揺れが激しいので、一瞬天井が崩れ落ちるのではないかと思った。見上げると天井から埃が舞い降りてキラキラ光っていた。2階からは慌てて逃げ出す足音が聞こえたが、先生は皆を強く制止して動かないように指示した。揺れが収まってから先生は何事もなかったかのように授業を再開したが、突然ぽつりと「地滑りが起きたんじゃないかなあ」と漏らした。丁度、長雨が続いた後だった。やがて生徒全員中庭に集められ、今日は帰宅するように言われた。臨時増発の市営バスに乗ったが、アスファルトには亀裂が入り、街の中心部では煙が立ち登っていた。

3度目は精神科医1年目の宮城県沖地震（1978年）である。丁度我々新人は教授の講義を受けていた。悲鳴を上げて逃げようとする同僚女性医師を教授が強く制止した。幸い建物に大きな被害はなかったが、エレベーターは動かず、9階の病棟と別棟7階の医局の往復に苦勞した。電気は通ったが、ガスはなかなか復旧せず、ホットプレートでの調理がしばらく続いた。

4度目は宮城県北部地震（2003年）である。栗原保健所の指導医をしていた関係で、当院に来ていたローテート研修医2名を連れて避難所巡りをした。いつも無表情だった研修医が「内心ではすごく感動していた」と話してくれたのが印象的だった。

5度目が今回の東日本大震災（2011年）である。民間病院では、石巻の恵愛病院、気仙沼の光ヶ丘保養園、岩沼の南浜中央病院が甚大な被害を被った。これらに比べたら当院の被害など小さなものだったが、我々病院には入院患者さんがいる。その人達の安全をどう確保するか、食事をどう提供するか、ガソリンのない中で職員をどう確保するかなど、問題は山積していた。とにかく自力で何とかするしかなかった。病院が落ち着いた頃、我々もお手伝いがしたいと思い、はあとぼーとの林先生に申し出て、当院のチームも六郷地区に出向くことにした。しかし、時すでに遅く、我々がやる仕事は少なかった。被災者の話を聞いていると、支援する側のこちらの方が心の支援を受けているような不思議な感覚も受けた。結局、我々の仕事は前線に出ることではなく、前線で傷ついた人達の後方支援であると思うに至った。

今、心のケアセンターは前線で頑張っている。支援はまだ続くだろうが、支援者自身が心の健康に留意して、その健全さを被災地に届けて欲しいと思っている。